

HIMALAYA

ヒマラヤ

No.340



2000 MARCH



日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

2001年H A J 登山隊隊員募集

中、ネ国境 ヤンラ・カンリ (7,429m)

ガネッシュ・ヒマールと言う名で日本人には馴染み深い山群の主峰がヤンラ・カンリである。

1955年10月24日、スイスの著名な登山家のレイモン・ランベール (41) と、フランスの女流登山家のクロード・コーガン (29) ら3人によって、ネパール側のサンジュン氷河から初登頂された。

60年5月31日、イギリスのP.J.ワレイスとギャルツェン、ノルブ2人のシェルパが主峰の東にあるドームに登頂したが、主峰は断念している。

いまだに第2登を許していないが、今回の計画は、中国領の北面から登頂を目指すもの。北面は1998年のH A J隊がカバン峰の帰途偵察隊として初めて入山し、登路を探った。手つかずの新鮮な山であり、静かな山行が楽しめる。

意欲ある岳人の応募を期待します。

記

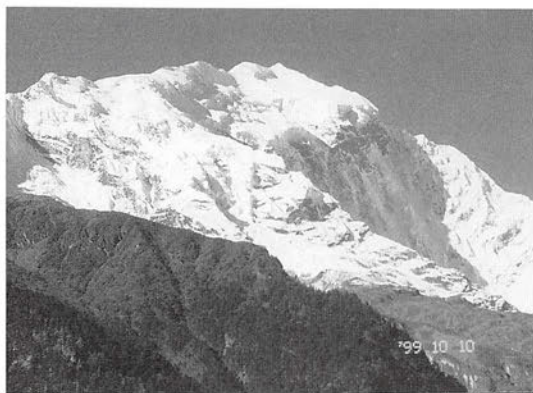
1.期間 2001年9月10日～11月8日 (60日間)

2.募集人員 10名程度

3.負担金 100万円

4.資格 冬山の稜線を20kg程度の荷物を持って行動できる登山経験のあること。協調性があること。未知の山に挑むリスクを認識できること。

5.申し込み〆切 2000年6月30日



▲ヤンラ・カンリ北面。中央左上から右下の稜を予定

表紙写真

ナムナニ峰北面の偵察を兼ねてグナ・ラ峰 (6,902m) へ登った。グナ・ラ峰は私達の目指したナムナニ峰とナムナニ氷河を挟み対峙し、まさに絶好の偵察ポイントである。ルート途中から望むナムナニ峰北、東面は、たおやかな西面とは全く違った形で望め、我々の登攀意欲を掻き立ててくれた。
(少々びびったが…)

(記：野沢井歩)

ヒマラヤ No.340

1. チベット連続登頂登山隊報告(中) カバン峰からナムナニ峰へ
孤高の山にアルパイン・スタイルで挑む ナムナニ(7,694m)北面
H A J 登山隊
16. ヒマラヤ・ニュース 〈地域ニュース・トピックス・ヒマラヤから・BOOKS〉
18. 第21回インド・ヒマラヤ会議報告
24. 寸感・事務局日誌

チベット連続登頂登山隊報告(中)

カバン峰からナムナニ峰へ

H A J 登山隊

孤高の山にアルパイン・スタイルで挑む

ナムナニ(7,694m)北面

ティ・セ雪山の名声は遥か遠くまで聞え

遥かな地で人々は言う

「ティ・セ」は水晶の^{ストゥーバ}「塔」のようだ

真近くやって来て

人はその頂が雪で被われているのを見る

〔まこと〕ブッダの予言によれば

この雪山は世界の中心

雪豹踊る所

水晶のような^{ストゥーバ}「塔」のその頂は

〔白くきらめく〕デ・チョック神の住処

★

西チベットに地上の曼陀羅があると言う

だがそれは其処に居てもそうとは気付かない

聖なる山ナムナニの頂からそれは見えるはず

遥かなる地で……。

★

10月25日午後、我々3人は稜線直下50mの氷壁にへばりついてた。直ぐ上にもものすごい勢いで流れて行く雪煙が見える。「あそこまで行けば」あそこまで登れば立って歩ける。それだけの事がとても魅力的に思えるのだが、その時の我々にとって、7,600m近い高度での50mの氷の壁は、まるで永遠に辿り着く事の出来ないシャンバラへの道程の様に思われた。

数年前なら「ジャンケンで勝った奴にトップを」と言うところだが、あまりに我々は疲れていた。あの上にコーヒーやブランケットを持って待っていてくれる仲間が居る分けではない。其処で倒れ込めば、待っているのはシャンバラでないのは分

かっている。

自分の年を呪いつつ、リードして掛かる時間を計算するが、これから登頂して6千メートル台迄下降する事を考えると、若い古谷に行ってもらう方がベターと思え、そうしてもらう。

あまり気乗りのしないようだった古谷は、ゆっくりだが確実に登って行く。思えば彼は今年(1999)の夏に初めて7千メートル峰のピークを踏んだばかりである。そして秋には7,600mの高みでクライミングをしている、良い時代になったとは言うまい、次回はジャンケンでトップを決めよう。

5日の間にスタカットで登ったのは此の50mと北面下部のクレヴァス通過時だけである。

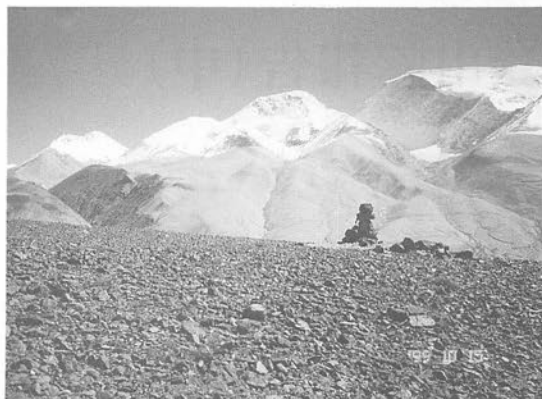
★

一枚の写真から始まったナムナニ計画は宴会の度に盛り上がり、醒めると消えた。何人かパートナーが変わり、そして何時も醒める事のない？野沢井、その後輩の古谷、そして私の3人が山森氏に隊長をお願いし、どんどん話が大きくなり、'99年の長い夏が始まった。

小カラコルムでスパンティークに登り順化して、ローカルバスと2等列車を乗り継ぎ、インド、ネパール経由でチベットへ。未踏の6千メートル峰を2つ登りナムナニに繋げる。たしかに酒を飲みながら語るには心踊るプランである。酒は夢を大きくするが実行するのはシラフの我々である。「なんでこうなったの?」なんて考えながら登っている事も多い。

★

▼BC裏山からグナ・ラ(左)、北峰(中)、ナムナニ(右)



スパンティークから、インド、ネパール、カバ
ン峰と予定通り旅は続き、何時も大まかな事しか
決めずにいる3人にとっては、あまりに予定通り
過ぎて少し息苦しく思う事もあったが、それぞれ
が日々の日程をこなして行く事でさらに予定通り
に消化されて行った。

10月12日、BC建設、14日、ABCの位置決定
とナムナニ氷河上部偵察、15日、ABC入り、17
～19日でグナ・ラ峰登頂、恐いくらいに順調である。

グナ・ラ峰から見たナムナニ北面は急峻に見えるが、ディランの時('96)も急に見えた南面の雪壁が取り付いて見れば登りごろの斜面であった事を思い、あまり気にしなかった。それより上部氷河(ザロンマロンバ氷河)に抜けるまでのロックバリアーである。東壁に廻り込めば氷壁になっているが雪庇が張り出している。7千メートルラインを越えてからの撤退は、アメリカ隊の轍を踏む事になるのであまり考えたくない。

色々考えてもしょうがないので取り敢えず行ってみる事にする。壁に触って見なければ何も解決しないだろう。雪の状態が悪ければ初日敗退だって有り得るのだし、逆にすんなり行くかも知れない。行ってみる事だ。

★

10月22日 朝8時の交信を済ませ出発。ガラ場をトラバースしてアブレーションパレーに入り6,000mのサポート・キャンプ(SC)予定地へ向う。そこでデポ品を回収してさらに重くなったザックを背負い、サポートに上がってくれた松館副隊長、樋上さんと握手を交わし、「さて行ってみますか」

と言う事で出発。

グナ・ラから偵察した通り、ナムナニ北峰南東面から流れ出る支氷河を目指し、うまい事入り込む事が出来た。暫く氷河の左岸を詰めてから横断し、主峰から北峰へと続く尾根のコルへ向うが雪のコンディションが悪く板状雪崩の一步手前位である。野沢井、古谷は直上して行き、私は右にトラバースして岩稜とのコンタクトラインを登って行くが、もう帰ろうかと思う程体力を消耗してしまった。雪面に乗るとそのままサーフィンが出来るくらいの雪の板が陥没して、体重を掛けるとその板が割れて足が潜る。潜らずに乗ってしまうとそのまま下に滑って行きそうでなお恐い。要するに「ヤバイ」のだが、ギリギリの所で三人の安全基準を下まわっていたようで、だれも降りようとは言わなかった。

★

コルに抜け出すとナムナニの北面が全容を現わした。

「エッ？」……。

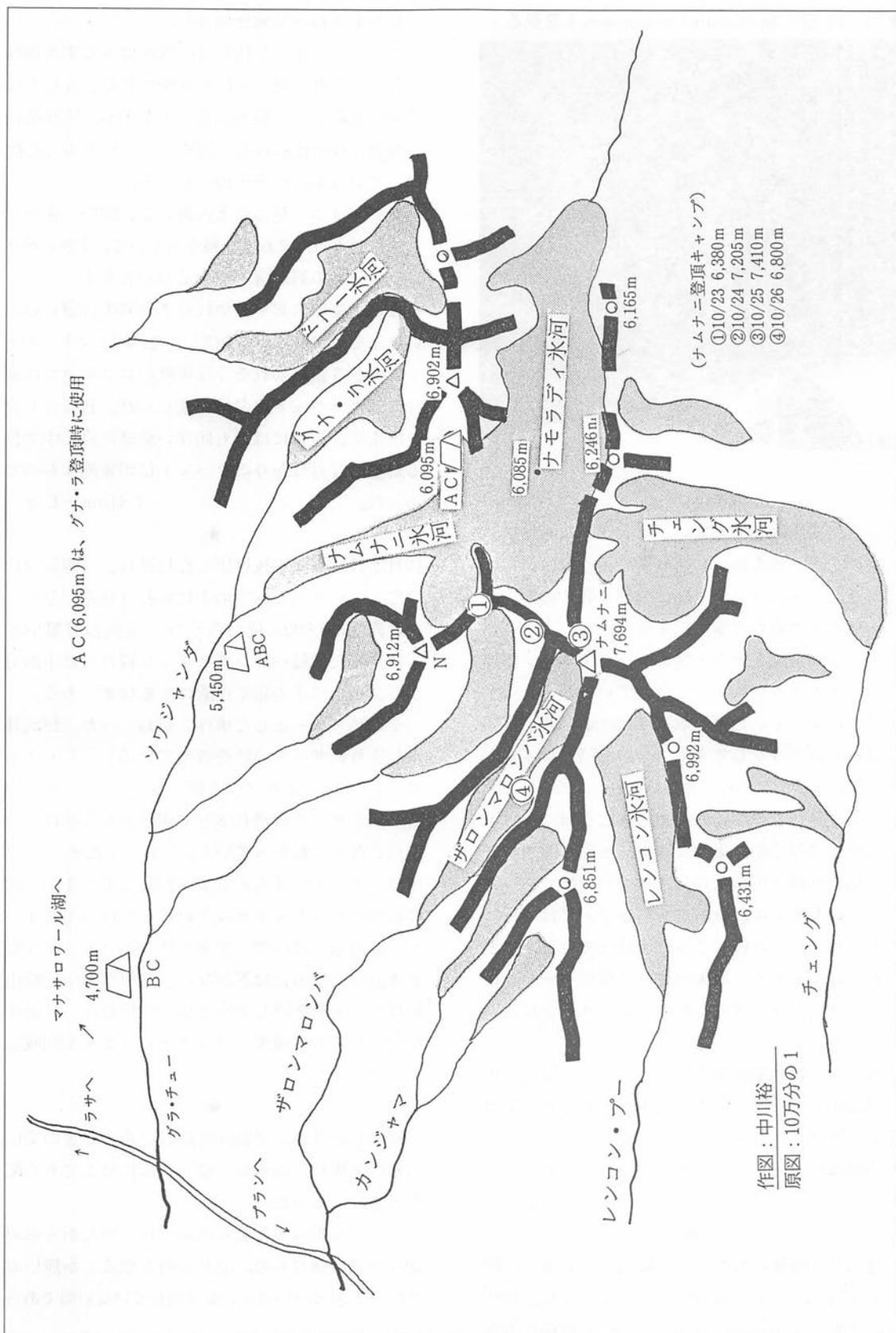
見えていた下部クレヴァスのさらに下に未だ上部の半分位セラックがあった。尾根沿いには北面に取り付く事が出来ない……。

すでにセラックはナムナニの陰になっており、初日から残業するのもつらいので、6,512mピークの下で夢をむすんだ。 -6,380m-C1-

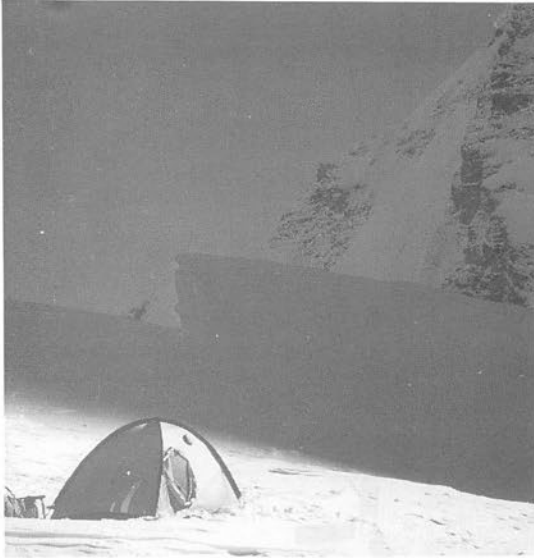
★

10月23日 気持ちの良い穏やかな朝日の中出発。今日は何処迄行けるやら、テントが張れればベスト、すわってビヴァーク出来ればベター、北稜まで休む所も無さそうだ……。

落ち着いたセラックではあるが、クレヴァスに右へ右へと追いやられ、北カンテは遠くなる一方である。それもラッセルしながらなのでペースがあがらず、日は高くなるが、なかなか高度は稼げない。しかし不思議と焦燥感は無く目前の障害を一つ一つかたずけて行く。最後に橋と言うよりは壁に立て掛けた脚立のようなスノーブリッジを2ヶ所渡って上部の雪面に出る事が出来た。そこは斜面に出来たコブの様な所で、ひと休みして上部の雪壁に取りかかる。そこからはラッキーにも雪が締っており、コンテのまま快調に高度を稼ぐ事



▼10/22 宿泊地(6,380m)と上部ルートを見る



が出来た。

落石や雪崩の心配も無く、クレヴァスも無い、紺碧の空とそれを斜めに切り裂くような白い雪。ただひたすら北カンテ上部に向けて登るのみ。此处では立って寝る事も出来そうにない。

セラックを越えた事と雪のコンディションが良いので3人とも気持ち良く登っているが、大雪面の登りは思っていた通り長く7,000mを越える頃にはベースダウンして来て、やがて暗くなった。カンテに近づくにつれて激しくなってくるブリザードの吹き降ろしの中、ひたすら休む事無くトロトロと登って行くが、第四コーナーを廻ってスタミナの切れた競争馬の様になさけない状態であった。

交信の為闇の中、ロープを解き2人には先行してもらおう。交信の後、こう言う状況では2人に追いつくはずも無く、最後の登りで更にバテバテになり、2人が見つけてくれたテントサイトに着いた。

カンテ上は強風が吹き荒び、テントは $\frac{1}{3}$ 程空中に飛び出している。とても食事を作れる状態では無く、紅茶だけ飲んでなんとか横になったが、一晚中風は止まず、テント内に霜が付く事もなかった。

-7,205m - C 2-

★

10月24日 昨夜の疲れからか寝坊してしまい、陽が高くなってからの出発になってしまった。順化はとてもうまく行っているが、高所の蓄積疲労が

それを上まわって来たようだ。

ロックハーケンを持たない我々は少しずつ東面に追いやられ、昼の交信を最後にBC、SCとの交信が途絶えた。最大高差でも400m、夕方迄には西面に抜け出られると高を括っていたので心配はしていなかった……のだが……。

グナ・ラから見たのと大違いで、思いっきりハングしたセラックが覆い被さっていて、上から徐々にナムナニの影が落ちてくるのが見える。

このままのスピードでは必ず登攀中に寂しい思いをしそうなので幕場を探し、奇跡的にマキシム・テントが3張は張れそうな東壁のコブを見つけ満月の出たチベットの夕景を楽しんだ。BCとも交信出来ず、辺りには誰も居ない東壁の真ん中で見る幻想的な月灯かりのチベットは印象的なものであった。

-7,410m - C 3-

★

10月25日 東壁を抜け出した私達は、一瞬気が抜けてしまい3人とも雪の上にすわり込んでしまった。高度は7,600m位だろうか。最後の登攀中左手に見えた岩稜がロングスタッフ稜だった事が分かり、頂上は手の届く位置にあるはずである。

その時ちょっとした事件？がおこった。野沢井がしきりにザックの数を数えている。「1・2あれ?」「1・2あれ?」2個しかザックが無い!!音も無くザックは滑り落ちて遥か下の雪面に一つの点となって転がっていた。「まいったナー」ブリザードの中、3人とも少々混乱してしまい、次には私のピッケルがザックのもとへ行行ってしまった。此处迄一緒に登って来たザックとピッケルだ、置き去りにするには忍びない、此处から山頂經由初登ルートを下降しようと思っていたが、計画を変更して頂上往復後、ザックとピッケルを回収して下山と決めた。

★

東面に廻り込んで約26時間BC & SCとの交信がとれず隊長、副隊長、樋上さんにはとても心配をかけてしまった。

ロープを張らずに突っ込んで行くのだから糸の切れた凧の様なもの。登れる所を登るしか無いのだからと思っていたが、糸は切れていないのであった。

今迄の山では、BCに現地スタッフのみと言う登山が多かったが、西面に出て26時間振りにBCと交信し、歓びを分かちあえる先輩達が其処に居てくれる事に、いつもとは違う安心感と感動を覚えた。

交信の後頂上へ向うが、バッテリー切れで、おまけにHAJの旗もザックに忘れてしまい後でひんしゅくを買ってしまう。

凍り始めた指でブリザードの中バッテリーを交換する事が出来ず、それからまた数時間交信不能となった。

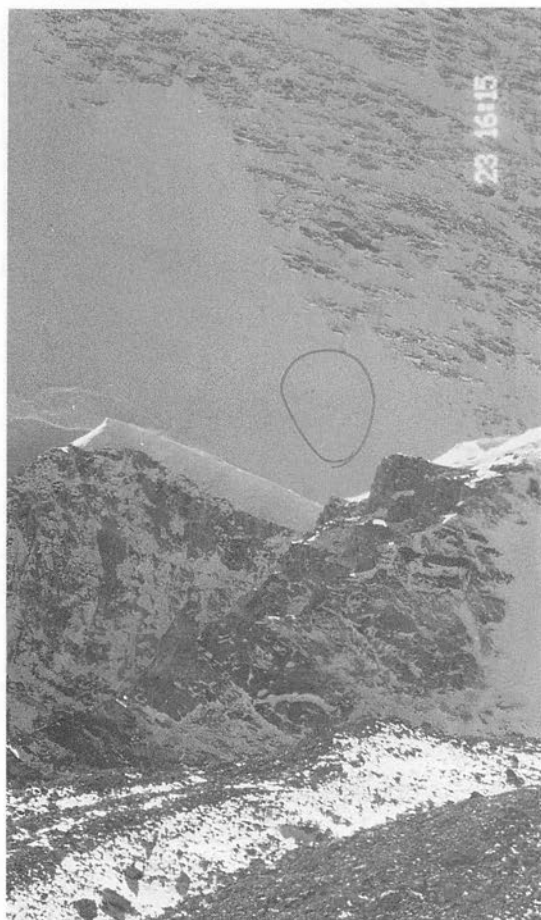
アタック前夜には電池を換えておく、なんて当り前の事すら忘れている。西面に出さえすれば安全と言う我々の思いだけで来てしまったので、毎日朝からシーバーをフルオープンしてくれている隊長の事を忘れた分けでは無いが、甘い考えであった。

結果だけでなく、交信の入らない26時間じっと待っていてくれた3人の先輩の気持ちを思うと申し分けない気持ちでいっぱいである。

★

ザック、ロープetc、をデポしてカメラなどのアタック用品だけを持ち、3人がそれぞれに登り出す。

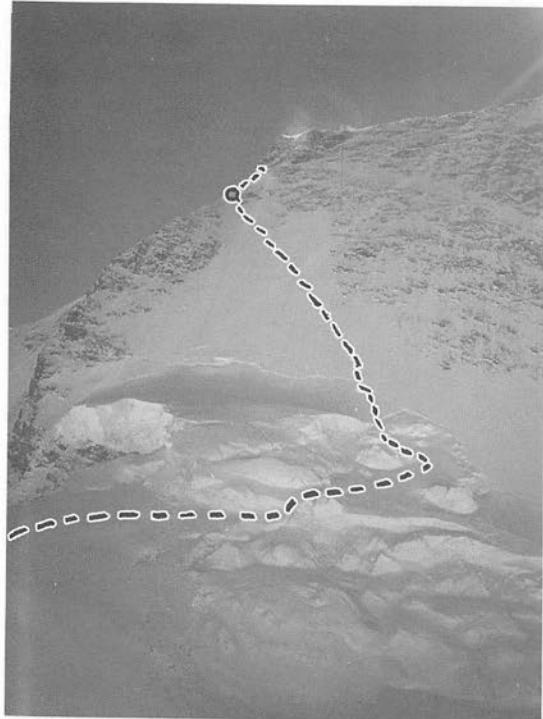
▼10/23 雪田を登攀する3人O印内を氷河上から見る



▶北面下部雪壁の登攀
上はナムナニ氷河。人物の下
の稜線上に10/22の幕
営地がある。



▼北面登攀ルート。アイスフォールから雪田へ



ナムナニに守られて風の無かった東面に較べて物凄いブリザードの中高度を上げて行くと、トップを行く野沢井からフィックスの残置が有るとコールが掛かった。それも7ミリのナイロン・ロープである。昨年の日本隊も初登ルートを行っているはずだからスイス隊のものであろう。よくまあ、この高み迄ナイロンを担ぎあげたものだと感じながら、ロープを横目に見て登る。

東壁を抜け出る迄の苦労を思えば、登頂の時は

余りに呆気無くやって来た。ルンゼを登り、野沢井達は稜通しに行き、私は雪面をトラヴァースしてから登りに掛かる。風でバタつくフードを上げると2人が待っているのが見え、3人で肩を組んで山頂を踏む、其処から普蘭（プラン）が見えていたのは、山頂での写真を焼いてから知った。

3人で抱き合い、肩を叩き至福の時は過ぎた。冷たい風が我々を現実に取り戻す。

「さて、そろそろ帰りますか」

ルンゼをクライムダウンしてデボ地に戻り、巨大なモナカと化したザロンマロンバの雪面をザックとピッケルを拾いに降りて行った。

—10月25—6,800m—C 4—



10月26日 山頂からの長い降りの途中一寸神秘的で面白い体験をした。

公路上から700mmの望遠でサポートしてくれる山森隊長の指示を受けながら下降して行くが、望遠で見ているとは言え、

「其処のスジみたいなクレヴァスを越えろ!!」

「エッ? これ5mはありますよ」

「……………」

と言うような会話を繰り返しながらの下山となる。ザロンマロンバ氷河も高度を下げるにしたがって雪が少なくなり、やがて消えた。

そこで我々は、5日間、頂上往復した時を除いて外す事の無かった8ミリのロープを解いた。

「ホッ」と気が緩む瞬間である、或る意味では山



▲表紙写真の右手前に長く伸びている北カンテが、上の写真の○印の下の稜。

◀ 10/24 三日月の登攀に入った3人○印内をナムナニ氷河上から見る。右の雪壁がルートとなった。

頂に着いた時よりも喜びは大きかったかも知れない。擦り切れてボロボロのロープだったが、言葉を交わさずとも緩めたり、張ったり、相手の望む通りに3人が操作して来た、一蓮托生のロープである。

ロープから解放されると景色も変わって見えるようで、立ち止まったり、石ころを蹴とばしてみたり、各自、自由に歩き始める、が…足が重い!!

1,700mの登りとモナカ雪の下り、すでに体力は売り切れ状態で、冬の間富士山頂で冬籠りして酒ばかり飲んでいる私が一番フラフラであるように思われた。

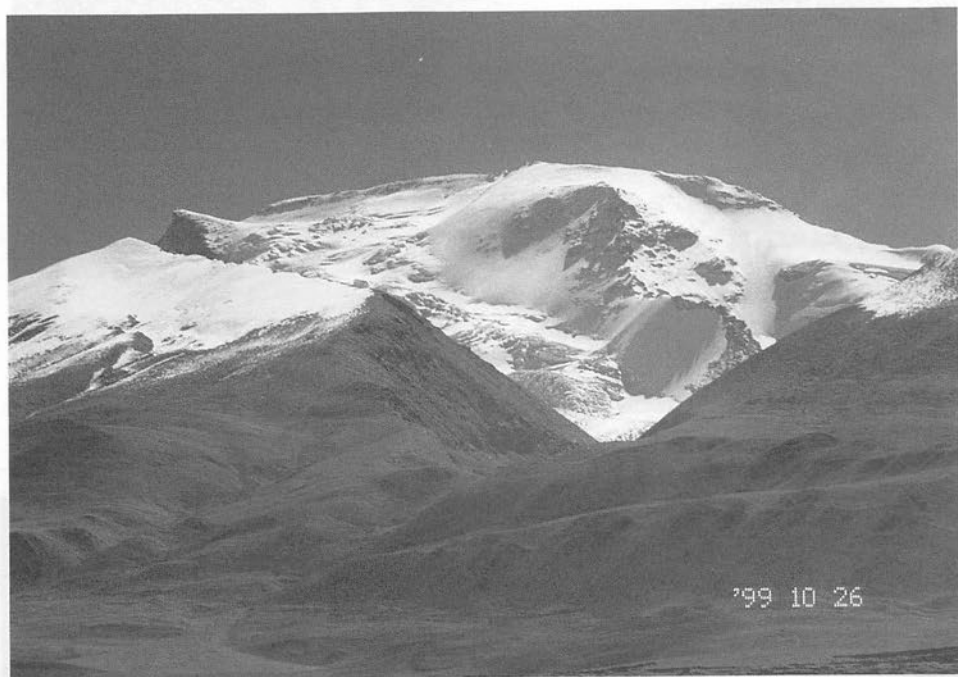
3人は自然に歩き易い所に一列になり、少し行くと夏の間に出来た流水溝が凍り、一条の帯となって続いていた。これが案外歩き易く、アイゼンを擦り減らす事も無いので辿って行くと、少しずつ溝が深くなって行く。最初はボブスレーのコースみたいだなどと言ってハシャいでいたが、そのうち空しか見えなくなり、やがてトンネルとなってしまった。一寸暗いが、トルコ石のようなうっすらとした緑色に氷河の年輪が白く浮き出てしかも四方は崑崙の玉のように光っている。ソルト・レンジ（パキスタン）で見た岩塩のトンネルも興味

▼頂上から地上のマングラ(奥にカイラス)を見る



深いものであったが、自然の作り出した此の造形物は、先がどうなっているかまったく分からず、所々ツララをピッケルで落としたりして進んでいるうちに、疲れた心がまた踊りだす。昔読んだベルヌの小説の一場面みたいで、暫く地底に潜って行く探検家の気分を味わった。今迄通って来た道での吹き飛ばされそうな風やブリザード、クレヴァス、二本足で立つ事の出来ない壁、その他モロモロの危険から守られていると言う安心感で私達の心は癒され、風も音も無い、狭苦しい、無限の空間を、3人の先輩の待つBCへと降りて行った。

-BC-



▲10/26 下降路となった西面ザロンマロンバ氷河。左上が頂上。左の三角岩壁は北壁。

▼ナムナニ頂上からナンダ・デヴィ(7,816m右端)、アピ(7,132m、ナンパ、ボバイエ左端)を見る



終りに

点線であったH A J予定ルートを、我々の手で(足で?) 実線のH A Jルートと出来た事を非常にうれしく思っている。今は我々をナムナニへと導いてくれた諸先輩、応援してくれた仲間々に只々感謝。

そして、84年、当時未だ未踏であったナムナニに敢えて西面からではなく、北面にルートを見つけ、点線を引いた山森隊長の酔眼……失礼……慧眼に敬意を表し筆を置きたい。

★

マ・ファム湖の名声はまことに遥か遠く聞え
遥かな地で人々は言う

「マ・ファム湖は緑の宝石のマンダラのようだ」
真近くやって来て

人はそこが〔冷たくて〕豊かな水で潤っているの
を知る

その昔、ブッダのなされた予言によれば
この湖は「決して暖かくなぬ湖」と呼ばれ
四つの大河の源^{みなもと}

魚やかわうその泳ぐところ

(記：岩崎 洋)



◀ 10 / 26
ザロンマロンバ氷河を下る3人(○印内)



◀ナムナニ
登頂を終えて下山した
左から岩崎、
野沢井、古
谷各隊員。

3つ目の頂、ナムナニ登頂記

10月22日

グナ・ラ登頂後、2日間ABCにてゆっくり休養した後22日にナムナニの頂上に向けて出発する事になった。

朝8時位に松館さん樋上さんに見送られABCを出発する。3人でのアルパイン・スタイルでのアタックになるために荷物は極力軽量化を図った。テントはエスパースマキシムの2～3人用の本体のみ、メインロープ1本、PPロープ1本、その他ガチャ類少量、食糧4泊分等である。

天気は相変わらず良く雲一つ無い好天である。ただ、10月の下旬となるとやはりかなり寒い。ナムナニの登山はかなり寒い世界での登山となるだろうと予測していたので、足周りには気を使い、ICIのスペシャルインナーと、オーバーシューズを作り、持って来ていた。

ABCを出てから3時間位で、前回グナ・ラを登頂して来たときにアイゼン等をデポしてきた地点に着く。そこで、しばらく荷物を整理しながら休憩をとり、この日の行動予定は、北面の雪壁の取り付け付近まで行きそこでビバークするという

計画であったので、北面の雪壁の取り付け付近まで行くためのルートを観察して出発した。

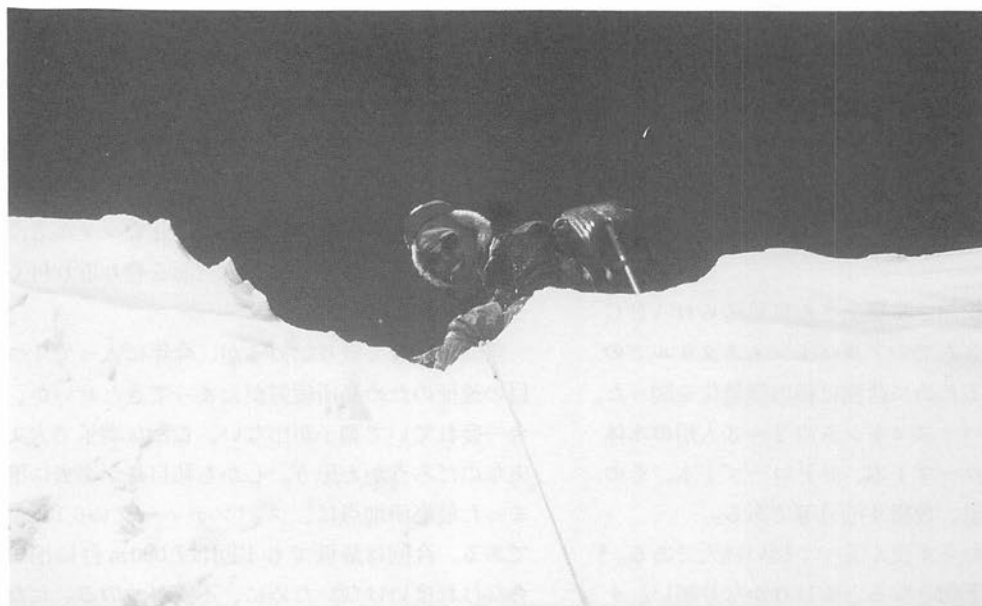
北面の雪壁の取り付けまでは、北カンテから派生する尾根に突き上げている雪面を登り取り付くことにした。

雪面に向けて登り始めるが、今年に入って4つ目の遠征のため高所疲労がたまってきたせいか、今一疲れていて調子が出ない、こんな調子で大丈夫なのだろうかと思う。しかも私自身が過去に泊まった最高所地点は、スパンティークの6,150mである。今回は最低でも1回は7,000m台に泊まらなければいけないために、不安がつのる。ただ、不思議と不安よりもワクワクとした気持ちの方が強かった。そんな気持ちを抱えながら、尾根に上がるための雪面を登り始める。

雪面の状態は非常に不思議な感じであった。気温がすごく低いからであろうか、雪面の表面の幅10cm程は固くしまり板状になっているのだが、その下の雪質が非常にサラサラしている。その為に雪崩やすく非常に怖い。また歩きづらく非常に疲れる。私と野沢井さんは雪面の真ん中を登り、岩

▶東壁上部を登攀する





崎さんは、雪面の右端の岩稜とのコンタクトライン付近に登っている。

しかし本当に疲れる。たいして長くもないこの雪面がどこまでも続いているように感じる。この雪面を登るのにどれくらいかかったのだろうか、ようやく北カンテから派生する尾根にたどり着いた。

さて今日のビバーク地点をどこにしようかという事になり、なるべく前へ進みたい私達は、北面の雪壁の取り付け、ぎりぎりまで行くことにした。そこからちょっとした岩稜を越え、なだらかな稜にでる、そこから取り付けまではそれ程遠くないが、かなり良いビバーク地が得られそうだったので、標高6,380mのこの地点に泊まることにした。

この日の夜は本当に寒かった、足の指先が寝ているとかなり冷たいので、オーバーシューズを履いて寝たほどだった。

10月23日

朝、核心部であろうと思われていた北面の雪壁に向けて出発する。偵察を兼ねて登ったグナ・ラから見た、ナムナニの北面はかなり急峻でこんな所登れるかよ、と思わせる程急峻に見えたが、実際近くから見ると思ったほど急峻ではないので、安心して雪壁に向かった。

北カンテから派生する尾根から雪壁に移るには、アイスフォール帯を越えなければならない。遠くから見た感じでは弱点を突いて登れそうであった

が、近くで見ると、それがかなり困難そうである。大きく右ヘトラバースして行けば登れそうにも見えるが、その上のクレバスが気になる所だ。トラバースをするとかなり時間的にロスになるので、なるべくトラバースをせずに北カンテ側を登りたいのだがそれが不可能に近い。いろいろと考え相談した結果、大きく右ヘトラバースしていくことにした。

なだれそうな斜面をトラバースして、クレバスをさけながら登っていく。途中で結構悪いクレバスを越え何とか、このアイスフォール帯を越えることが出来たが、越えたときには、時間が14時を過ぎていた。時間が時間だけにここでビバークした方がいいのではないかという意見もでたが、さらに登っていくことにした。

雪壁を登り始める、雪面はカチンカチンに凍っているのではなく、踏み後が付くぐらいの雪面で比較的登り安かったのでコンテで登ることにした。

しばらく登っていくと雪面には日が当たらなくなり、風も吹いているために非常に寒い。特に足が寒い、だんだん手の指の感覚が無くなってきて、しびれてきた、時折手袋から指を出して暖めながら黙々と登っていく。ビバーク地になりそうな所が遥か前方に見える。他にはビバークできそうな所がないので、そこまでは登らなくてはならないかと思うと途方に暮れてしまう。

日が落ち始め、周りの風景が徐々に暗くなり始

めてから、しばらくして、標高7,205m地点に何とかビバーク地になりそうな所があったので、強い風の吹く中急いで斜面をスコップで切り何とかテントを張り、急いでテントの中に入り込んだ。

しかし非常に疲れた、強風でテントがあおられ落ち着けないような雰囲気だが、そんな事はどうでも良いというような感じである。夕食を取ろうとするが全く食欲がわからない、私は結構食べる方で、昨日まではいつも通り食べていたのだが、この時はお茶だけでも十分といった感じであった。

予定では、明日に頂上へ向かう予定である。頂上への期待を抱きながら床に就く。疲れていたからであろうか、私にとって初めての7,000m台での睡眠であったが、いつも通り寝ることが出来た。

10月24日

昨日の疲れのせいだろうか、かなり寝坊してしまった。少し焦りながらも出発する。予定では、北面をこのまま登り西面に出て頂上を踏む予定であった。

出発してすぐに、北面の雪壁は抜けることが出来たが、上部に岩壁があり西面へ抜けるルートがなかなか見いだせない。とりあえず、東壁側にトラバースしながら登って行くが、なかなか西面へのルートが見いだせずどんどんと東に向かっていく。どんどん時間がたち焦り始めてくる。こんな調子では今日中に頂上へたどり着くのは無理なのではないかという思いも抱き始める。

ようやく、無理矢理突破できそうなセラック帯の斜面を見つけ強引に登り始めるが、時間がもう18時を過ぎていたために、これ以上登っていくと、この寒さでは凍傷が心配なために、どこか適当なところでビバークすることにした。しばらく付近でビバーク地を探すもののなかなか見つからない、しばらくするといくらか下ったところに平らな部分が見えたので取りあえずそこへ下っていくと、風もなく平らでとても過ごしやすそうなビバーク地であったので、今日は7,410mのここに泊まることにした、ふと、そこから上部を見上げると綺麗な雪壁が稜線まで続いていた。しかも我々は東壁までトラバースして来たために、この上がすぐ頂上ではないかと予測できた。

テントに入り落ち着くが、やはり今日も食欲が

▼ナムナニ頂上（左・古谷、右・野沢井）



ない。しばらくして、明日こそ頂上だと思い、床に就いた。ただ東壁に回り込んだ為、朝BCと連絡してから全然連絡が取れていないので、BCではかなり心配しているだろうと思っていた。

10月25日

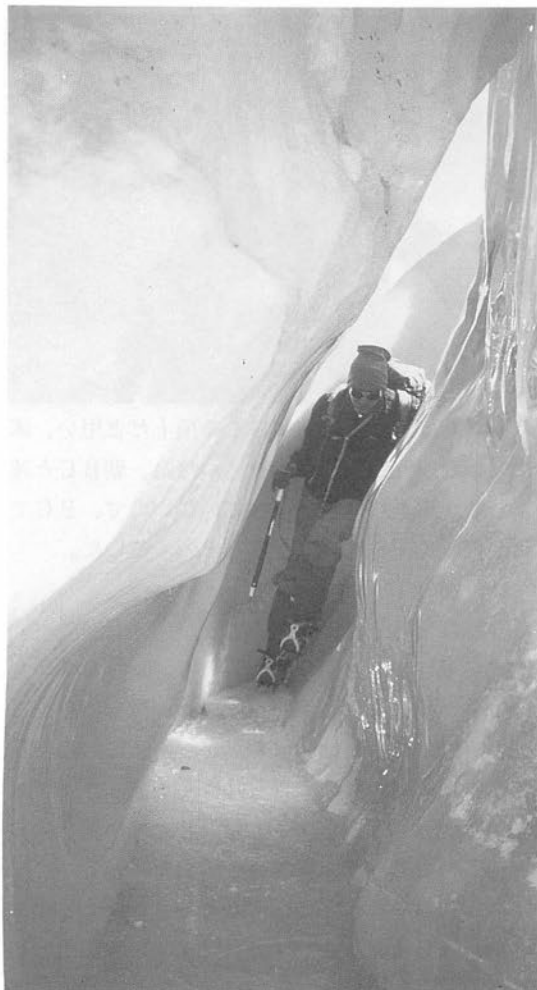
今日は寝坊せずに起きることが出来た。

昨日予定したとおり目の前の雪壁を登っていく、途中1カ所クレバスが開いていたが難なく越えることが出来た。私は、なんだか腹の調子が良くなりあまり力が出ない。野沢井さんがトップで登っていたが、しばらくすると野沢井さんが足が吊るというので私がトップで登り始めた。

トップを交代してしばらくすると、いくらか柔らかかった雪面から、カチンカチンの氷が出始めコンテで登るのはやっかいになってきたために、スタカットで登ることにする。頂上はもう目の前という感じなので気合いを入れて登り始めた。目の前に雪庇が現れここを越えれば、頂上付近か、西面に出られることは間違いないのでかなりほっとした気持ちになる。雪庇の手前でピッチを区切り野沢井さん達が登ってくるまで待つ。雪庇を越すくらいのロープは余っていたので、そのまま私が登り始めた。雪庇をピッケルで切り崩し何とか稜線に出るが、その瞬間西側からの強風と、雑誌で見たとおりの風景が飛び込んできた。強風にあおられながらも、ようやく西面側に出れたことで嬉しさが体中を駆け巡った、頂上へはここからすぐのように見えた。

稜線で野沢井さんと岩崎さんが登ってくるまで待つ。岩崎さんが最後に登ってきて、26時間ぶりにBCに無線を入れる。山森隊長のホッと

▼ザロンマルバ氷河の氷の回廊



したような声が聞こえ、今までのクライミングでの緊張がほぐれたような気がした。

そこから荷物をデポして頂上まで行くことになるが、これまでの緊張が急にほぐれたせいとか、ザックは落とすは、ピッケルは落とすはのハプニングがあったものの、何とか頂上へ向けて出発した。

岩と雪のちょっとした壁を登っていると残置されたフィックスロープがあった、いったいどここの隊のものなのだろうか。ザックをデポした所から数10分で頂上の手前につき、3人で肩を組み同時にナムナニの頂上に立った。私にとっては3つ目のヒマラヤの頂上になるのだが、初めてヒマラヤの頂上に立ったときよりも遥かに嬉しく、涙があふれ出てきた。

頂上からBCに無線を入れようとするが電池が切れ繋がらないのが残念であった。写真を撮り、

真の頂上の石を拾いまくり、登頂の嬉しさに心を踊らせながら下山し始めた。予定では、今日BCまで降りる予定であったのだが。

私たちにとっては、全く未知である西面ザロンマルバ氷河を下降ルートに取ったために、公路上から、山森隊長が双眼鏡でのぞきながら、左だ右だと指示を受けながら下降して行く。この日の内にBCまで降りるのはとても無理だと判断し、6,800m地点に泊まることにした。

しかし、ボロボロである、もう何もしたくないといった感じである。

10月26日

これまでの疲れのせいでなかなか起きることが出来ずかなり寝坊してしまった、おかげで出発したのが12時くらいであった。

昨日と同様、山森隊長が公路上から双眼鏡でルートを探り私達に無線で指示して、それを頼りに下るのだが、山森隊長の言う事と実際の氷河の状態が違うため、かなり困惑しながらの下降となった。なんだかんだやりながらどんどん下降し、だいぶ降りたところで、不思議な氷の回廊状となったクレバスの間を降りる。そこを抜けるとガレ場になり、ノーマルルートのBCに着いた。

そこからは、ガレ場をただ黙々と歩き続けた。何時間歩いたのだろうか、あたりが暗くなり始めた頃に、遥か前方に人工的な何かが見える、山森隊長が待つ車ではないかと心を踊らせるが、あまりにも疲れているために、幻覚ではないかとも思いあまり期待せずにその人工的な何かに向かって歩き始めた。やがてその人工的な何か車がであることが分かった。ようやくゴールである。しかし疲れた、本当に疲れた。ようやく山森さんにたどり着くことが出来た。98年から思い抱いたナムナニの登山を終え、本当にほっとした瞬間であった。

車の中で、今までの行程と、登頂の喜びをかみしめながら、日が落ち真っ暗になった中を、松舘さんと樋上さんの待つBCへと向かった。

(記：古谷朋之)

聖湖の山、グナ・ラを登る

10月18日7時隣りのテントから、「お茶が入りました」の声がかかる。「行くすけ」と返事をし、樋上氏と2人テントの外に出ると、空はいつもの快晴だが、昨日の夕方からちらついていた雪が、1cm位テントの上に積っている。隣りのテントでお茶と朝メシと身仕度を済ませ、8時にACを出発する。

グナ・ラ峰の西稜の取付に向う。時々昨夜の雪の吹き溜まりの所で「ボソッ」と入る時も有るがわりと雪は締っている。西稜の取付からは「ガレ場」になる。雪線の所に9時20分に着く。ここからはアイゼンを付ける。皆のは「ワンタッチ」なので取付けは早い、私のはバンド式なので少し時間をとる。その後、左手の中指の先が冷たくなり痛くなったので、オーバー手袋の中のフリースの手袋を毛の手袋に換える。初めての経験その後はOK、なぜだかわからない。

先行の野沢井、古谷、樋上の3人の後を追って雪面を登る。雪はほどよく締ってアイゼンの効きが良い。10時6,320m地点の尾根のカゲ、岩崎君が私の後でしんがりを守ってくれている。12時に6,610m地点、野沢井、古谷先行、その後に樋上少し遅れて松館その後に岩崎の順に進む。

この頃から私は「喉のタン」が切れず、力むと呼吸が苦しく30歩位歩いた所で止って呼吸を整えなければならず、少しずつ先行メンバーより遅れてくる。14時6,920m地点野沢井、古谷、樋上は頂上のそば、私は200m位遅れているが、この辺からほぼ傾斜がなくなる。頂上はゆるいドーム状なのが分る。

先行メンバー3人が頂上の手前で待っていてくれる。5人揃ったので肩を組み5人一緒に14時14分に「1、2、3」で頂上をふむ。「やったー」皆と替わる替わる握手をする。

交代でBCの隊長とトランシーバーで交信し登頂の挨拶とお礼を言う。その後記念写真を取る。少し余裕が出たので周りを見ると、グナ・ラ峰の頂上は一大展望台だ。南側のネパール、インドの国境の山々は雪をかぶって美しく輝いている。

残念なことに、カン・リンボチェはラカス湖の上の雲で見えない。カン・リンボチェを入れた登頂写真が取れないのは心残りだが、14時32分に下山にかかる。雪面はほどよく締っているが、ツアッケを引掛けない様に注意して下降し、17時30分ナムニ氷河に全員降りる。今日はAC泊り。

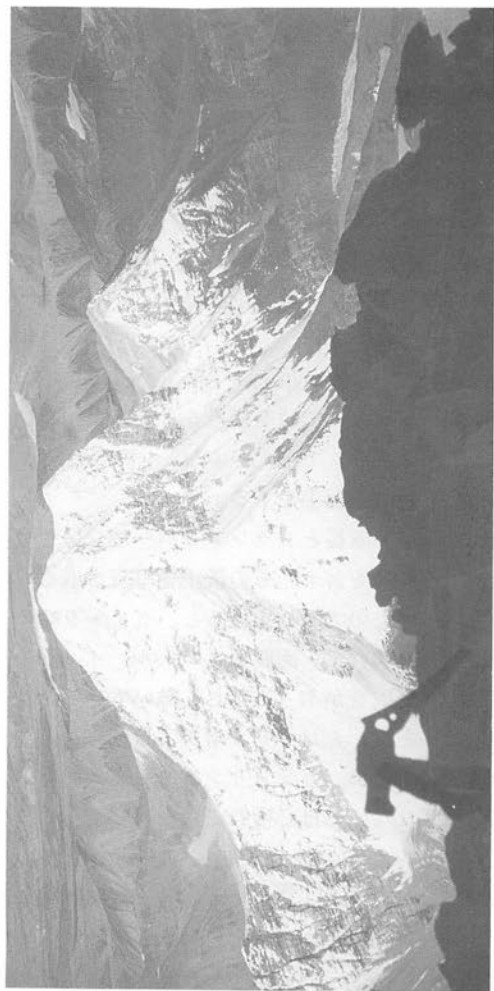
(記：松館正義)

▶グナ・ラ（六九〇二米）西面、ルートは右の稜線にとる



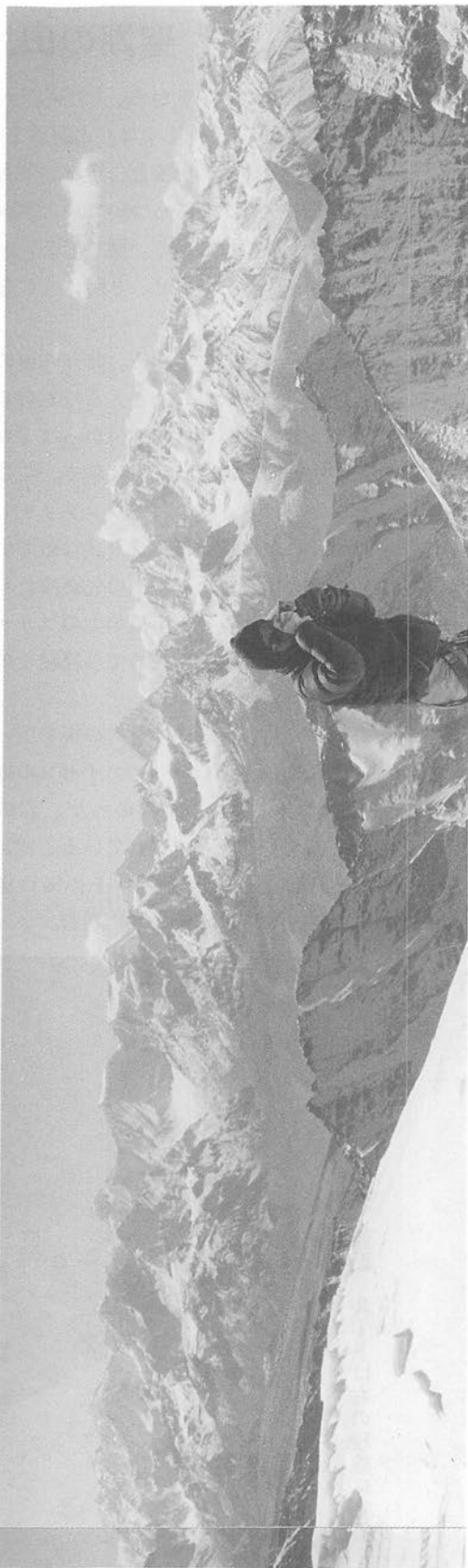


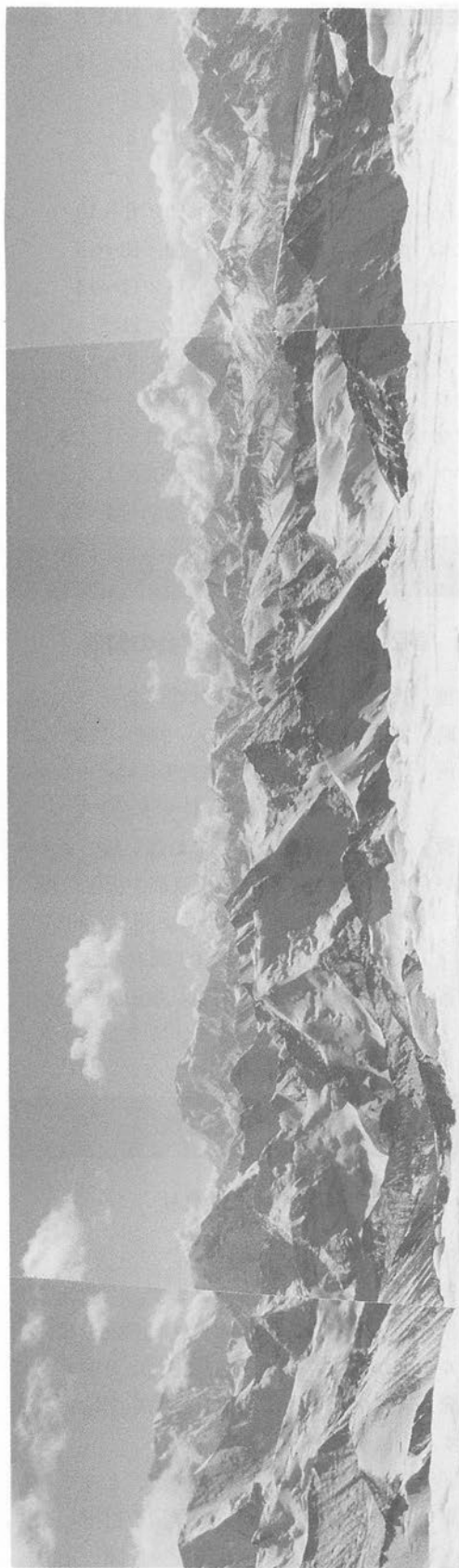
▲グナ・ラ山頂で(左から古谷、岩崎、松館、野沢井)



▲ナムナニ東壁 7410 m 地点から見たグナ・ラ。ルートは正面の凹状部

▲グナ・ラ山頂上から。人物の右上がアビ(7132 m)、左ヘナンバ(6755 m)、ボバイエ(6808 m)、ジェティ・ボフラニ(6850 m)、ダウラガリ(6632 m)





▲手前は中国、奥はネパールの山々。左の雲がかかっているのがフィルコフ(6736m)、その右がラマ・ピーク(6800m)、右端はキウリ・カラ(5806m)



▼上の写真の左に続く。フィルコフ(6736m)、その左の雲の中にサイバル(7031m)、手前に右からナラカン・カール(6613m)、6521m、6395m

地域ニュース

《ネパール》

群馬隊、冬のマナスル断念

マナスルの冬期登頂を目指していた群馬県山岳連盟隊(名塚秀二隊長(45)ら7名)は、1月6日と8日に登頂を試みたが強風に阻まれて7,100mに到達したもののBCへ下山。

1月9日から1週間、降雪のためBCで停滞を余儀なくされた。17日と18日の2日に分けて2パーティが頂上アタックのためBCを出発したが、強風のため登頂を断念してBCへ下降した。

《中国》

チョモランマに3隊が挑戦

今春のチョモランマに日本の3隊が挑戦する。

東北6県と新潟県で構成する「東北地区海外登山研究会」が母体で派遣する登山隊は、宮城県の八嶋寛隊長(50)ら8名。隊員は青森県を除く各県から参加する。

北海道山岳連盟が派遣する登山隊は、江崎幸一隊長(48)ら7名。このうち江崎隊長ら一部の隊員は、秋のマナスル北峰、冬のマナスルに挑戦した。

法政大学が派遣する登山隊は、中村敏夫隊長(60)ら16名。いずれも北面ルートを予定しているが、既に3隊で協力態勢を構築して現地での登山活動がスムーズに展開できるよう準備を進めている。

《ブータン》

2000年お祭りリスト

名 称	月 日
プナカ ドムチェ	2/10~15
チョルテン コラ	2/19、3/6
ゴム コラ ツェチェ	3/13~15
チュカ ツェチュ	3/13~15
パロ ツェチュ	3/16~20

ウラ ツェチュ	4/15~18
クジェ ラカン ツェチュ	7/11
ティンブー ツェチュ	10/6~8
ウォンディホダン ツェチュ	10/5~7
タムシンパーラ チョパ	10/8~10
タンビ マニ	10/13~15
ジャンベ ラカン ドゥブ	11/11~14
ジャカール ツェチュ	11/11
モンガル ツェチュ	12/3~6
タシガン ツェチュ	12/4~7
トンサ ツェチュ	2001/1/3~7
ルンツイ ツェチュ	2001/1/3~7

(BHUTAN 1999.12.31 第66号から)

トピックス

第21回 高所順応研究会の開催

- ・主催 東京都山岳連盟・海外委員会
- ・日時 2000年3月5日(日) 9時~17時
- ・場所 国立オリンピック記念青少年総合センター
(小田急線参宮橋下車徒歩5分)
- ・会費 3000円(昼食は各自でお願い致します)
- ・問い合わせ 〒104-0031 東京都中央区京橋
1-9-9 湘南産業八重洲ビル401号
東京都山岳連盟 ☎ 03-5524-5231
- ・内容 高所障害の実例と対処(塩田純一氏)
パルスオキシメーター、ガモフバック、
酸素器具。

ヒマラヤから

冬のマナスル便り

ナマステ

6年ぶりのネパールにきています。今回は群馬県山岳連盟で厳冬のマナスル(8,163m)にノーマルルートから挑みます。12月16日にカトマンズを出発し、2000年1月1日より登山を開始する予定です。

2000年問題とは無縁の世界ですが、とっても寒いと思います。寒さにめげずに登頂を目指します。

12/15 カトマンズにて 佐藤 光由

BOOKS

中高年登山者のための生理学

サガルマータ、K2、マナスルなど高峰登山の経験を持ち、都岳連高所順応研究会などの講師を長い間担当している塩田純一医博が登山者のために発刊したもの。国内登山の留意点はもとより、ヒマラヤ・トレッキングで問題となる「肺水腫」や「脳浮腫」なども実例をあげて解説している。読み易くわかり易い一冊である。

A5判 188頁 1999年12月10日刊

本の泉社 1714円＋税

運命の雪稜

山溪前編集長の神長幹雄氏の著書。現役のころ「山と溪谷」誌上に執筆した、遭難に関する記事とその後、遺族を取材してまとめたもの。

国内は、大山で遭難した高見和成氏ら2件、ヒマラヤは、ウルタルⅡの山崎彰人氏ら5件と95年

11月のネパール、トレッキング大量遭難がとり上げられている。

事故防止の原則の一つに「歴史に学ぶ」がある。つまり事故事例を勉強することだが、そのために本書のような出版が望まれる。

B6判 285頁 2000年1月1日刊

山と溪谷社 1500円＋税

東京集会のお知らせ

日時 2月28日(月)午後7時～
内容 ヒマラヤの情報管理とアンケート
場所 HAJルーム(地下鉄有楽町線東池袋下車4番出口から地上に出て右へ徒歩2分)
又は、JR大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面2つ目の東池袋4丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩2分)

山の情報誌「岳人」

GAKUJIN

岳人

毎月15日発売(日・祝日の場合は前日) 定価700円

■本誌の年間購読ご案内

本誌の購読は、全国の書店、東京新聞販売店、中日新聞販売店、北陸中日新聞販売店で承ります。直接購読ご希望の方は、とじ込みの振替用紙に「岳人何月号」からとお書きのうえ、送り先郵便番号、住所、氏名を明記して、ご送金ください。郵送料は124円です。年間購読料は8,900円で送料は当社負担です。お求めの本誌に乱丁、落丁がありましたらお取り替えいたします。

2000年

特集

- | | |
|--------|------------------|
| ★ 1月号 | 雪山入門 日本の山を楽しむために |
| 2月号 | 現代山岳スキー 思想・用具・記録 |
| ★ 3月号 | 日帰り縦走、ひと味違うハイキング |
| 4月号 | 日本列島、恵みのブナの森を訪ねて |
| ★ 5月号 | 陽光の日本アルプス |
| ★ 6月号 | 日本全国、知られざる花の名峰 |
| 7月号 | 夏こそ、海と島の山旅 |
| 8月号 | はるかなる源流の峰々へ |
| 9月号 | 一度は泊まろう静寂の山小屋 |
| ★ 10月号 | 紅葉のみちのくの山並み |
| 11月号 | 冒険、修験、岩塔の山 |
| 12月号 | 野生動物と出会う山 |

(★は特大号・800円となります)

東京新聞出版局 (中日新聞) 〒108-8010 東京都港区港南2-3-13 ☎(03) 3740-2674 (直)
東京本社 全国の書店で発売中／中日新聞販売店でも取りつぎます

第21回インド・ヒマラヤ会議報告

H A J主催による新春恒例のインド・ヒマラヤ会議は、今年21回目となり1月16日東京・池袋の豊島区民センターで行われた。

会議には全国から、99年実施隊や2000年にインド・ヒマラヤへ出掛ける予定の登山隊の方々など38名の参加をみた。

H A Jの酒井國光会長の開会の挨拶の後、会議日程に入った。

9時40分～11時55分 「99年隊登山隊報告」

労山のバギラティ2峰（宮崎孝氏）、グループ・ド・モネージュのストック・カンリ（桑川章氏）JAC東海のドン（鈴木常夫氏）とウムドン・カンリ（水野起己氏）初登頂の報告が、スライドを交えてなされた。

13時00分～14時20分 「インド登山の実務」

H A J山森欣一理事長から、最近の日本とヒマラヤ登山の現状やそれに対応するための対策の現状について報告と協力要請があり、主にトランシーバー、EPIボンベ、別送品、GPSなどについて質疑が行われた。

14時35分～16時45分「インド・ヒマラヤの魅力」

H A J尾形好雄常務理事が東のシッキムからガルワール、ガンゴトリ、カラコルムの山々をスライドを駆使して、その豊富なインド・ヒマラヤ経験をもとに魅力の数々を語り紹介された。

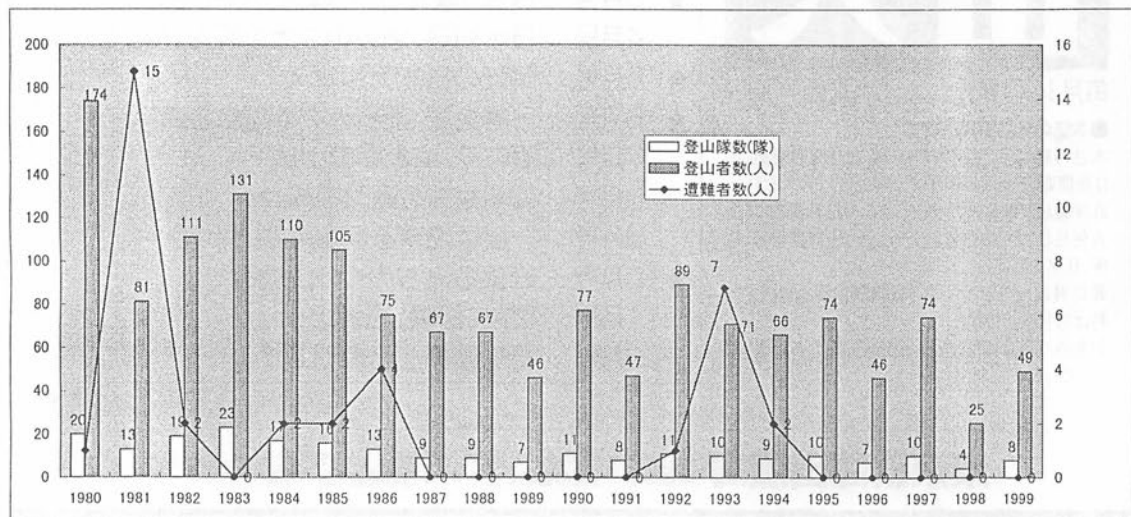
これで予定の会議日程を終了し、H A J八木原紈明常務理事の挨拶で閉会となった。

1999年インド・ヒマラヤをめぐる動き

1998年インド・パキスタン両国が相次いで核実験を行い、核保有国となった事を受け、カシミールの帰属をめぐる両国の国境紛争のエスカレートが危惧された。年が改まって1999年2月には両国首脳が国境を越えてバスで訪問しあい、一部の停戦合意も伝えられ、雪解けが進んでいたかのように見えた5月、停戦ラインを越えてインド側に入りこんだイスラム原理主義民兵にインド軍は本格的な空爆を持ってのぞんだ。民兵組織を支持するパキスタン軍も交えた激しい戦闘が行なわれた。夏になって民兵側が停戦ラインの内側に戻る事で

最近の日本隊の入山と遭難の推移 ※1994年以降は把握できたもののみ。

	1980	1981	1982	1983	1984	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	合計
登山隊数(隊)	20	13	19	23	17	16	13	9	9	7	11	8	11	10	9	10	7	10	4	8	234
登山者数(人)	174	81	111	131	110	105	75	67	67	46	77	47	89	71	66	74	46	74	25	49	1585
遭難者数(人)	1	15	2	0	2	2	4	0	0	0	0	0	1	7	2	0	0	0	0	0	36
死亡率	0.57%	18.52%	1.80%	0.00%	1.82%	1.90%	5.33%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	1.12%	9.86%	3.03%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	2.27%



戦闘は終結したが、イスラム側のエネルギーはパキスタンでの軍事クーデターへと展開して行った。10月にはパキスタンのシャリフ政権は倒れ、ムシャラフ参謀長を長とする軍事政権が誕生した。インドでは総選挙が行なわれ、98年の核実験強行などで強いインドを主張し続けた現政権が勝利した。

このように昨年のインドを巡る情勢は大きなうねりが訪れた。日本から登山を行った登山隊は8隊、1980年代初頭の全盛期からみればさびしい限りである。そんななかで日本山岳会東海支部隊が行った、スピティ地区での二つの初登頂は、同会が長年培ってきた積み重ねの成果であり、すばらしい記録である。また、グループ・ド・モネージュ隊のストック・カンリ（6,153m）は、先に述べた国境紛争の起こっていたジャム&カシミール州での登山であり、日本外務省からの渡航延期要請の出ている中での登山であった。同隊以後、ジャム&カシミール州で登山に必要なXヴィザの発給が停止されたと聞いている。昨年から再び設けられたトレッキング・ピークの許可で行なわれた同隊の登山は、BC建設から4日間で登山隊員7名中6名が登頂するという速攻登山で、交通機関が発達したインド・ヒマラヤの利点をいかした登山である。また、労山のサトパントでは氷河の縮小？など環境の変化のために、目標の山を変更せざるを得ないという事態も起きてきている。過去の登

山の記録を山行に登山をするのは当然の事だが、現場に行ってから、そうした変化に柔軟に対応する能力も必要とされてくるのかもしれない。

インドでの外国登山隊の活動に目を向けると、日本ヒマラヤ協会30周年で招聘し記念講演をしていただいたH・カップディア氏が、その時にスライドで紹介していた、ガルワールのアルワ・タワー（6,352m）の見事な岩峰がイギリス隊（ミック・ファウラー隊長）によって初登された。トレイ・サガル北壁にはロシア隊によって新たなルートが加えられた。

インド・スピティの最高峰、ギャ峰はこれまで度重なる挑戦を退けてきたが、昨年ついにその頂上をインド隊にあげわたした。IMFが派遣したクマオンのパンチ・チュリⅢ（6,433m）とブルフ・ドゥラ（6,343m）はいずれも頂上直下で敗退している。

残念ながら外国隊の活動は現時点ではわずかしか入手できていない。一昨年来のパキスタンとの国境紛争、昨年、大きく燃え上がったカシミール紛争などの影響で、東部カラコルム、J&K州はラダックエリア以外での登山は行なわれなかったようである。

それ以外の州では支障なく登山が行なわれたようであるが、今年は大事無く登山ができることを願いたい。

1999年インド・日本隊の結果

2000/1/16 中川 作成

山 名	標高	季	派遣母体/隊名	隊長名	数	ルート	成否	備 考
サトパント	7,075	夏	日本勤労者山岳連盟	宮崎 孝	9	NR	×	ルートの状況が悪く5500mで断念。
バギラティⅡ	6,512					EF	○	サトパントから転進。8/16に8人が登頂。
ウムドン・カンリ	6,643	夏	日本山岳会・東海	水野 起己	7	WR	○	8/8に隊長と青戸隊員HP2名が初登頂。
ムルキラ	6,517	夏	北稜山岳会	水野 二郎	3	ES	×	
メルー北峰	6,450	春	グループ・ド・コルデ	加藤 泰平	4	WF	×	悪天、日数不足の為にシャークス・フィン5900mで敗退。
ドゥン峰	6,200	夏	日本山岳会・東海	鈴木 常夫	6	NR	○	8/8に隊長ら4名とHP5名が登頂した。
ラホール山域無名峰	6,184	夏	熊谷トレッキング同人	澤入 保忠	12	ES	×	8/10に隣接する5600m峰に3名が登頂。
ストック・カンリ	6,153	夏	グループ・ド・モネージュ	茂呂 貞夫	8	SR	○	7/4に4名、翌日に3名が登頂。
					49人			

インド・ヒマラヤの登山許可取得の方法

登山申請

インド・ヒマラヤでの登山に、ネパール登山のように（社）日本山岳会の推薦状を必要としない。登山隊は直接インド登山財団（IMF）に申請する事が出来る。この場合の方法も手紙、FAX、Eメールなどの方法から選択する事ができる。

インド登山財団（IMF）連絡先

The Honorary Secretary,
Indian Mountaineering Foundation,
6, Benito Juarez Road,
New Delhi 110 021,
INDIA
Phone: 91-11-4671211, 4677935, 4671572,
Fax: 91-11-6883412
E-mail: indmount@de12.vsnl.net.in
Indmount@vsnl.com
Web site: <http://www.indmount.com>

また登山申請用紙などの必要な書類の書式は上記のIMFのホームページから取得する事ができる。

1. 仮登山申請

これは希望する山が、希望する時期に空いているかを確認し、空いていれば予約（Booking）をお願いする申請である。IMFは同ルートに登山隊が複数入山する事を許していない。これはネパール、中国、パキスタンなどより登山する側に立った考えである。オープンピークのうちいくつかの有名峰は、人気が高いので早めに申請しないと希望する時期に登山できないことがある。

申請書の記入次項は

①登山隊名及び国籍

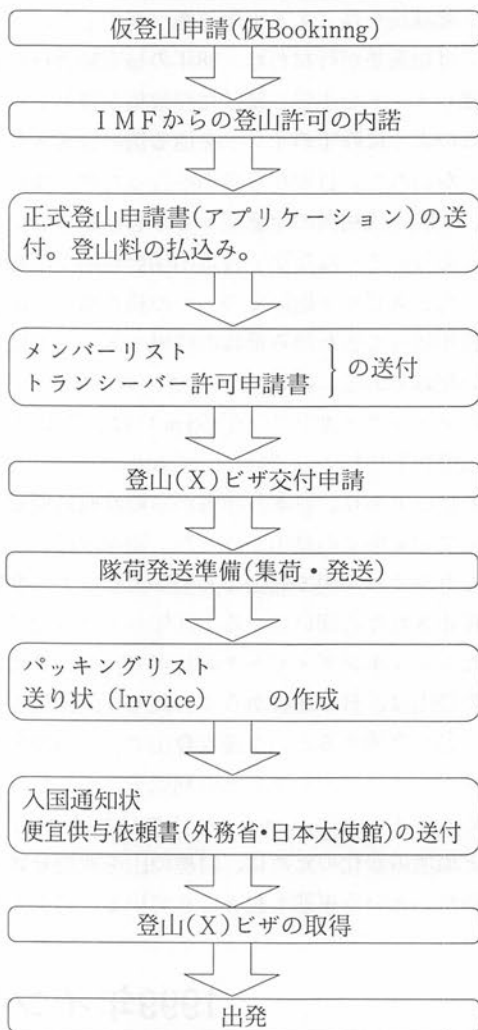
②目標の山と標高及び経度と緯度

申請峰が競合する場合もあるので、第2希望まで記入しておくのが望ましい。

③経度と緯度を明示したアプローチ図及びルート概念図。

どの稜、どの壁を登りたいのか明記のこと。様々な地図から転載するのは構わないが、国境未確定

インド登山の手続きの流れ



エリアについては十分に注意した方がよい。ビザ取得の遅延の原因になる可能性がある。

④遠征期間

- a) インド入国から出国までのおよその日程。
- b) ベースキャンプ到着から撤収までの実質の登山期間。

⑤隊長並びにメンバーリスト

氏名、父親名（死亡の場合も記入）、国籍、現住所、本籍、電話番号、FAX番号、年齢ならびに生年月日、職業、パスポート番号、並びに発行地および取得年月日。最近親者並びに続柄および住所（緊急時の連絡の為）、過去1年以内の訪印の年月日ならびに訪印場所。登山やトレッキング

の経験。自衛隊、警察、政府関係の職務についているかどうかなどを記載する。(資料BIO-DATA参照)

⑥登山隊の派遣母体名と日本国内の連絡先。

以上を記載した申請書に簡単な願い状を添えてIMFに送付する。だいたい一ヶ月位でIMFから登山許可の内諾書と申請用紙が送られてくる。尚、これらの手続きは、前述したとおり現在FAXもしくはEメールでも可能である。

2. 正式登山申請

IMFから送られてきた申請用紙に必要な事項を記入し、申請書、契約書のそれぞれの箇所に隊長のサインをする。

記入する事項は、仮申請書の同様の事項の他に、事故などの際、その処理費用をまかなう各隊員の6千ドルまでカバーする保険加入に関する証明、ヴィザを申請、受領するインド大使館、領事館名の住所ならびにファックス番号。トランシーバー携行の有無、あるいはIMFからのレンタルを申し込むかどうか、インド国内のエージェントの利用。IMFでの宿泊、装備のレンタル、トランスポートのアレンジなど、IMFへの要請がある場合には詳細に記すこと。

尚、登山料は従来とことなり、正式登山申請と一緒に送付することになった。内諾書の発効日から2ヶ月以内に登山料が支払われない場合には登山許可が取り消され、他隊から申請が出ている場合には、次の登山隊に許可がまわされてしまうので注意したい。

正式登山申請用紙と一緒に送付するのは以下のとおり。尚、送金とそれに関連しては次項に記す。

- a) アプローチおよびルート概念図(8部)
- b) 日程表(8部)
- c) 写真を添付したメンバーリスト(8部)

(BIO-DATA)

- d) 登山料
- e) 環境税(400ドル)
- f) 連絡官用装備貸し出し料(500ドル)
- g) トランシーバー貸出しを望む場合にはレンタル料

3. 登山料

IMFから登山許可の内諾書が送られてきたから、その発行日に注意しなくてはならない。登山料の払込の期限が、その通知の発行日から2ヶ月以内と定められているからだ。

もし2ヶ月以内に登山料が払い込まれない場合には、仮許可は取り消され、人気のある山の場合には、ほかの登山隊に許可がおりてしまう。また、予約した後に、登山隊の都合で登山をやめた場合には、登山料の25%をIMFに支払わなければならない。

・登山料

東部カラコルムの山	4000ドル
制限地域の山	4000ドル
ヌン&クン	3000ドル
7001m以上の山	3000ドル
6501m～7000mの山	2000ドル
6500m以下の山	1500ドル

登山料を表に記したが以下の制限、並びに例外がある。

a) 隊員数制限

表の料金は東部カラコルムをのぞいて隊員数12人までの料金である。13人目からは1人につき300ドルが追加され、隊員数は最大16名まで。

東部カラコルムはインドとの合同隊でなければ許可が下りない。最大の隊員数16人は変わらないので、この半分の8人が最大の隊員数。

現在単独での登山は許可が下りない。

b) シッキム

シッキムで登山を行う場合には、上記登山料に、さらに下記の登山料を支払う。尚、目標の山が未踏の場合には、追加登山料はさらに倍になる。

・シッキム追加登山料

カンチェンジュンガ	20000ドル
8001m以上の山	8000ドル
7501m～8000mの山	3000ドル
7500m～7001mの山	3000ドル
6501m～7000mの山	2000ドル
6500m以下の山	1500ドル

- c) 一時廃止されたトレッキング・ピークが昨年から下記のとおり復活した。

ストック・カンリ 6153m	ラダック
ハヌマン 5316m	UP
ラダキー 5342m	HP
フレンドシップ 5289m	HP

これらのピークは登山料300ドル。けれども連絡官とXヴィザの取得が義務づけられたために正規の登山隊とあまり変わらない環境になってしまった。

d) その他

インド登山では、主目標以外の山に登ろうとする場合、同じBCから登山をする場合に限り2つめのピークから登山料は半額となる。

登山期間の制限もあるので注意すること。

また、トレッキング・ピーク以外のピークでは環境税として400ドルが徴収される。

4. 登山料他の支払い

これまで紹介した料金は、バンク・ドラフトか銀行送金、あるいはクレジット・カード（ヴィサまたはマスター）でIMFに支払うことになる。IMFは現金や小切手での送金を受け付けていない。バンク・ドラフトの場合はニューデリーに支店のある銀行であればどの銀行でも良いが、送付先をインド登山財団とする。

銀行送金の場合、IMFの口座番号は下記のとおり。送金した後、隊長名、国、山名などを明記して、送金票のコピーをIMFに送ることを忘れてはいけない。

No OIS-AP 11414-00, ANZ Grindlays Bank,
Marcha Marg, New Delhi

5. ヴィザ申請

登山隊でインドに入国するさいは、Xヴィザ（登山ヴィザ）を取得しなければならない。このヴィザは観光ヴィザとことなり、在日インド大使館や領事館で申請用紙に必要事項を記入すると、その書類はインド本国に照会され、本国のOKが出てヴィザ交付となる。したがって交付には1～

3ヶ月という時間がかかる。出発から逆算し、十分余裕をもってヴィザ申請をしたい。

ヴィザ申請時に、メンバー・リストがIMFに届いていないと、インド本国での照会がおくれてヴィザ交付が遅れる。また、申請書類などの記載事項に不備があった場合にも交付が遅れるので注意したい。

ヴィザ申請に必要な書類。

- a) ヴィザ交付申請書 3部
記入時の注意
 - i 記入はタイプ打ち（ワープロ切り貼り）
 - ii 職業欄には会社名、所在地、電話番号を明記する。
 - iii 渡航欄にはこれまで訪れた場所を、年月日を新しいものから記入。
 - iv サインはパスポートと同じサインを3部とも自筆とする。
- b) 顔写真（パスポートサイズ） 3部
 - i 裏面にローマ字でサインをして申請書の左上に張る。
- c) IMFからの登山許可書のコピー 3部
- d) IMFからの登山料払込領収書のコピー
（領収書が送られてこない場合、送金した際のコピーでも可） 3部
- e) 派遣母体の領収書（Certificate） 3部
- f) 登山計画書（英文） 3部
 - i アプリケーションのコピーで可。
（メンバーリストと地図を添付したもの）
- g) 隊員のパスポート（残存期間6ヶ月以上）

6. 外務省、日本大使館への届出

インド・ヒマラヤの登山の場合、登山許可の取得に（社）日本山岳協会の推薦状は必要としない。したがって外務省、在インド大使館などに書類をだす義務はないが、ご存知のように、高所登山の場合には2%をこえる遭難死亡率が教えてくれるとおりに、安全な登山などありえない現実がある。また、登山隊を送り出した後、したがって、もしもの時には、お世話になる外務省、および在インド日本大使館へは登山計画書他の書類を提出しておくことが望ましい。

外務省提出書類

- a) 和文計画書 1部
b) 英文アプリケーションコピー 1部
c) 願い書（関係諸機関に対する便宜供与依頼書）
オリジナル1部
コピー1部
d) 念書（登山隊にかんする一切の責任を負う旨
を誓約する念書） オリジナル1部
コピー3部

在インド日本大使館送付書類

- a) 和文計画書 1部
b) 英文アプリケーションコピー 1部
c) 英文メンバーリスト 1部
d) 願い書（遭難事故発生時における便宜供与依頼書）
オリジナル1部
コピー1部
e) 念書（登山隊にかんする一切の責任を負う旨
を近約する念書） オリジナル1部
コピー3部
f) 外務省に提出した願い書、念書のコピー 各1部

※それぞれの送付先は次項に記載する。

※在インド日本大使館は特命全権大使の名前を確認した上で送付のこと。

関係諸機関

1. 外務省

外務大臣官房文化交流部文化第二課

東京都千代田区霞が関2-2-1

☎03-3580-3311 内線2873 〒100-0013

※願い書の宛先 外務大臣官房文化交流部長

2. 在日インド大使館 (Embassy of India)

東京都千代田区九段南2-2-11 〒102-0074

☎03-3262-2391/4 FAX 03-3234-4866

3. 在日インド総領事館 (Consulate General of)

兵庫県神戸市中央区磯辺通4-1-8

I T Cビル8階

☎078-241-8116/7 〒651-0084

4. インド政府観光局東京案内所 〒104-0061

(Government of India Tourist Office)

☎03-3571-5062/3 FAX 03-3571-5235

5. インド航空 (Air India)

東京都千代田区有楽町1-8-1 日比谷パークビル6階 〒100-0006

☎03-3214-7633 (旅客) 1981 (予約)

FAX 03-3214-0080

6. 在インド日本大使館 (Embassy of Japan)

50-G, Chanakyapuri, New Delhi 1110 021

☎91-11-6876564, 6876581~3

FAX 91-11-6885587

全権特命大使 平林 博

7. インド登山財団 (Indian Mountaineering

Foundation)

6, Benito Juarez Road, New Delhi

1110-021

☎91-11-4671211, 4677935

FAX 911-11-6883412

E-mail: indmount@del2.vsnl.net.in

Indmount@vsnl.com

Web site: <http://www.indmount.com>

2000年インド・ヒマラヤ日本隊計画

山名	標高	地域	季節	派遣母体	隊長	隊員数
Gephan 峰	6113	ヒマチャル・プラデッシュ	夏	宇都宮谷峰会	田沢 孝	7名
ムルキラ	6517	セントラルラホール	夏		柳 穰	3名
メントーサ	6443	セントラルラホール	夏		小畑 和人	11名
無名峰	6222	スピティ	夏	東京理科大OB	加藤 孝子	14名

■ 寸 感 ■

2000年元旦を故郷、北海道支笏湖で迎えた。朝4時半に自宅を出て紋別岳(865m)に向かった。御来光を見るためである。途中まで星が輝き、苫小牧の灯りも見えていたが、やがて風雪となった。6時半山頂の三角点を踏んだ。麓に着いた8時、陽が差してきた。印象深い長靴雪中遠足だった。

事務局日誌(1月)

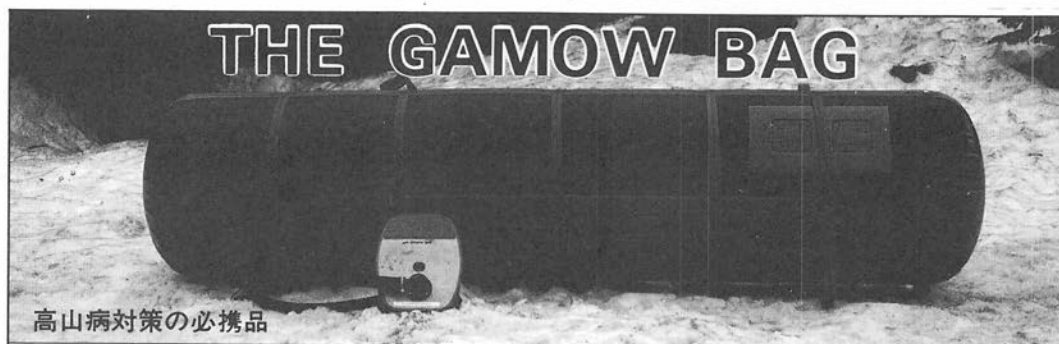
- 6日(木) 仕事始め
- 7日(金) 日山協から「アンケート調査」回答
- 8日(土) 若尾峰決定通知書3名発送
- 11日(火) ヒマラヤ339号発送
クーラ・カンリ協議(山森、岩崎、野沢井)
- 16日(日) 第21回インド・ヒマラヤ会議(豊島区民センター 39名)
- 17日(月) JACから「アンケート調査」回答
- 20日(木) 労山から「アンケート調査」回答
- 21日(金) 「アンケート調査」実務者会議通知

関係者へFAX

- 22日(土)～23日(日) スパンティック隊合宿
(ルーム、山森、岩崎、野沢井)
'94年ミニヤ・コンカ福沢隊員関係者ルーム来局(山森、渡辺斉)
- 28日(金) 遠藤登前会長古希祝い(八丁堀、地どり亭24名)
中国登山協会代表团(4名)歓迎会(同上)
- 31日(月) 東京集会(23名)

ヒマラヤ No.340 (3月号)

平成12年2月10日印刷 12年3月1日発行
 発行人 山森欣一
 編集人 山森欣一
 発行所 日本ヒマラヤ協会
 〒170-0013 東京都豊島区東池袋4-2-7
 萬栄ビル501号
 電話 03-3988-8474
 郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」



ガモフバッグとパルスオキシメーターのレンタル開始!

加圧しただけで約2000m下山したのと同じ環境を作るガモフバッグ、高山病診断、予防のためのパルスオキシメーター。高所を目指すあなたをそろって力強くサポートします。

- ガモフバッグ(携帯用高压バッグ/総重量6.7kg)
- パルスオキシメーター
(血中酸素飽和度測定装置/重量380g/単3乾電池4本使用/携帯型)

総代理店：日本メディコ株式会社

レンタル・販売問い合わせ先：株式会社 ティ・エッチ・アイ

〒135 東京都江東区木場2-5-7 KHビル7階
 TEL: 03-5245-0511 FAX: 03-5245-0510
 (隊荷の輸送、航空券の手配などもお任せください。)

TREASURE TOUR



EXPEDITION & TREKKING

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

—— 遠征隊、トレッキング、秘境への旅 ——

あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、
お客様の要望に遠征経験豊富なスタッフがご答えします。

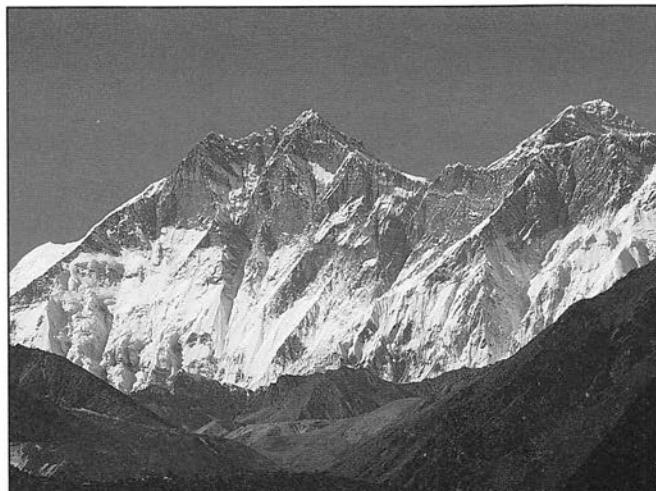


マウンテントラベル株式会社

〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F

☎03-3574-8880

三井航空サービス代理店2452号



遙かなる高みへ

**トレッキング・
登山隊の許可
取得から航空券・
現地手配までお引き
受けいたします**

～ネパール・インド・ブータン・
パキスタン・中国・
東南アジア・アフリカ・中南米～

トレッキング・海外登山・シルクロード・
秘境旅行のパイオニア



**株式
会社**

西遊旅行

運輸大臣登録旅行業第607号・日本旅行業協会正会員

■本 社 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-3-1
岩波書店アネックス5階
☎03(3237)1391(代) FAX 03(3237)1396
■大阪営業所 〒530-0026 大阪市北区神山町6-4 北川ビル5階
☎06(6367)1391(代) FAX 06(6367)1966
■カトマンズ連絡事務所 (JAI HIMAL TREKKING / SAIYU TRAVEL)
P.O. BOX 3017, Durbar Marg, KATHMANDU, NEPAL
☎221707, 224248

●格安航空券はこちらに！



キャラバンデスク

キャラバンデスク東京(住所:本社内) ☎03(3237)8384(代) FAX 03(3237)0638
キャラバンデスク大阪(住所:大阪営業所内) ☎06(6362)6060(代) FAX 06(6367)1966

◆パンフレット請求や個人旅行のお申し込みは
フリーダイヤル をご利用下さい
(通話料無料)

☎0120-811395

西遊旅行ホームページ (<http://www.saiyu.co.jp/>)

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

- 登山本店／〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3208)6601代
- スキー&カヌー本店／〒169 東京都新宿区大久保2-18-10 ☎03(3209)5547代
- 新宿西口店／〒160 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(3346)0301代
- 新宿南口店／〒151 東京都渋谷区代々木1-58-4 ☎03(5350)0561
- 神田登山店／〒101 東京都千代田区神田神保町1-8 ☎03(3295)0622
- 神田店／〒101 東京都千代田区神田神保町1-4 ☎03(3295)3215
- 神田ウェア館／〒101 東京都千代田区神田神保町1-6-1 ☎03(3295)6060
- 八王子店／〒192 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426(46)5211
- アネックス八王子店／〒192 東京都八王子市横山町3-6 ☎0426(46)3922
- 川越店／〒350 埼玉県川越市南通町14番4 ☎0492(26)6751
- 大宮店／〒330 埼玉県大宮市宮町2-123 ☎048(64)5707
- 高崎店／〒370 群馬県高崎市新町5-3 ☎0273(27)2397
- 松本店／〒390 長野県松本市中央2-4-3 ☎0263(36)3039
- 新潟店／〒950 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025(243)6330

- 新潟ブラーカ店／〒950 新潟県新潟市天神1-1 ブラーカ3 B1 ☎025(240)2316
- 仙台店／〒980 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022(297)2442
- 盛岡大通店／〒020 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎0196(26)2122
- 札幌店／〒060 札幌市中央区南二条西4-8 ☎011(222)3535
- ルート36真栄店／〒004 札幌市豊平区真栄一条2-13-2 ☎011(883)4477
- 北十二条店／〒001 札幌市北区北十二条西3-5 ☎011(747)3062
- 2番街店／〒060 札幌市中央区南二条西1-5 ☎011(219)1413
- 旭川店／〒070 旭川市六条通8-37-2 ☎0166(24)5300
- 外商部(メールオーダー)／〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3200)7219



ICI 石井スポーツ

事務所／〒169 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004